

頸椎神経痛顛末記

染谷 秀雄

クリスマス翌日、いつものようにさて寝ようとベッドに横になろうとしたとき、右肩に激痛が走った。どうしたことだろうと起き上がってじっとしていた。暫くして痛みが治まってきたところで横になったがまたしても激痛。仕方がなくベッドに脚を垂らしてただじっと痛みが治まるのを待った。もの凄い痛みだ。取り敢えず家にあった痛み止めを服用して様子を見たのだが横になれずにそのまま座って夜を明かした。午前中に早速、かかりつけ医の紹介状を持って近くの病院へ行った。昼近くになってしまったが紹介されたのは整形外科。昼近い時間であったが、まだ診察待ち。何処へいっても整形外科は繁盛のようで患者で溢れていた。先ず頸の辺りのレントゲンを数枚撮り、詳細を診るMRIがここでは混んでいて直ぐには出来ないということで別の専門のところへ行つて撮影、その結果、「頸椎神経痛」と診断された。何でも頸椎の五番、六番辺りが狭くなっていることで流れが留まってしまつていて手術しない限り当面は痛み止めという対症療法になるとのこと、昼間には痛みが出ないならば夜だけの服用で大丈夫でしょう。眠くなるので一日夜一回十日分の薬を処方された。ただ、医師が契約医で第二週の金曜日だけ診察と言われ、不安ではあったが仕方なく薬があればまあいいかと了承した。これで正月に医者休みでも過ごせると思っていた矢先、また、ベッドに横になろうとした途端に激痛が走り、やつのことで起き上がり、ただじっと坐ったまま四時間ほど眠った。その間も市販の痛み止めを服用した。こんな生活は今後体力的に続かないと思われ不安であったがようやく一月第二金曜日となって、一日二回服用できる分の薬を大量に処方して貰った。

時折痛みは走ったがそれも徐々に痛みがなくなり、いまは痛みも出ずに過ごしている。